

知識についての断片的反省

北 岡 崇

私は私自身について、また私の環境を構成する諸事物、諸事情について、更にまた「隣人」についていくらかの知識を所有している、と、さしあたり、考えている。というのは、現に私は、私が今、形の定まりにくい思考にたずさわっているということを意識しているし、その思考の歩みが新しい原稿用紙の枠目を一つずつ埋める文字において表現されてゆくということ、そしていつかその表現が幾人か他の者のまなざしにさらされるということなどを意識しているからである。この意識こそが、さしあたり、私には、私が右に述べたいくらかの知識を所有しているということを証しするものであるように思えるのだ。少なくとも、知識を所有することから知識を所有すると考える(意識する)ことを切り離すことはできない。財産を所有するとか時計を所有するとかの場合なら、誰かがそれを所有することと本人がそれを所有すると考える(意識する)ことは、必ずしも結合しているとは限らない。一方は、他方なくともありうることなのだ。つまり、時計をポケットにしまい込んでいる或る男が、自分は時計を所有していると考えない(意識しない)こともあるし、時計を所有していない別の男が時計をポケットに所有していると考え(意識する)こともありうる。しかし、知識の場合は、

その知識を所有するということは、必ずその知識を所有することの意識をとまわなければならない。例えば、右の例に挙げた、時計をポケットにしまい込んでいる男が、自分は時計をポケットにしまい込んでいるという知識を所有するのは、時計をポケットにしまい込んでいるということを意識する時だけである。しかし、その男は、自分は時計を所有していないと考える(意識する)、あるいはもっと適切に語るなら思い込むこともありうるし、先の例に挙げたように、時計を所有していない別の男が時計をポケットに所有していると考え(意識する)、思い込むこともありうるのであるから、意識が意識内容の真実性を全面的に保証するとは断言できない。とはいえ、真なる知識にとって、その知識にその知識の意識がともなうことは不可避である。知識とは意識に捉えられてはじめて知識となる。意識のいわば「外」にある時、すなわち意識されていない時は、知識は本当はどこにも存在しない。その時、知識は決して意識の「外」と呼ばれるどこかに存在しているわけではない。私は教師からいくらかの知識を学び取ってきたのであるが、そして現在いくらかの知識を所有しているらしいのであるが、実は私がその知識を所有する以前には、その知識は私から見て本当はどこにも

存在していなかったのだ。たしかに、私は、その教師が何らかの知識を所有していることや、その教師との関係を介して知識を学び取ることができるだろうことを推測はしていたし、その限りまたその推測を意識していたことであろう。しかし、その当の知識を教師が所有しているということを私は知っていたわけではない。もし知っていたとすれば、私はすでにその当の知識を所有していたことになろう。光の波が眼球に打ち寄せたり、手紙が郵便受けに投げ込まれたりするような仕方、知識が心のA外Vから心のA内Vへと飛び込んでくるというようなことは決してありえない。手紙の場合、それが存在する場所の相違は、手紙にとって本質的なことではないが、知識は心のA内Vという場所にあつてはじめて存在しうるのである。知識は意識の光によって照らし出されてはじめて知識である。もちろん、表現の直接的な意味において、知識が書物の中に存在するということなど決してありえない。そのようなことがあるとすれば、もっとも多くの書物を所有している人がもっとも多くの知識を所有しているということにならう。私は誰かとの対話の中で、あるいはまた書物を読むという迂路を介しての著者との対話の経験によって、一つの知識を獲得する時、私の心の中であたかも炎が突如燃え立つかのような感情を覚えることがある。学び取る知識であれ、知識は、心が心においてその知識をい、わ、ば、創、造、するとい、う、仕、方、で、生、じ、る、も、の、だ、か、ら、で、あ、る、。

知識を所有することとその所有を意識することとの関係について以上述べてきた思想は、ジョン・ロックの次の思想と一致する。ロックの哲学上の主著『人間知性論』から、まず二箇所引用しよう。「およそ人間はすべて自分が考えているということを自分で意識しているし、考えている間にその心が向けられているのは観念であ

る……」。(3)「考えるということは人が考えることを意識するところに存する」。(4)これらの箇所、ロックはくり返し、考えるという働きが生じる時その働きにとってその働きの意識・自覚が不可欠であることを指摘している。しかも、知識は思考内容として、つまり考えられているものとしてはじめて成立するのであるから、ロックによれば、知識の所有という事態が成立するためには、それを所有していることの意識・自覚が不可欠な条件であるということになるはずである。ロックはまた、次のようにも述べている。「人間は目覚めている時でも眠っている時でも、考えているということを感じせずに考えることはどんな時でもできない」。実際、ロックが述べているように、考えるということ、従ってまた知識を所有するということは、思考者ないしその知識の所有者が「目覚めている」か「眠っている」かの相違とは関係がないとすれば、それは、少なくとも「眠っている」からといって考えていないとは限らないという、眠りの把握を前提にして言えることである。たしかに、いわゆる眠りの中でも、知識を所有するということはある。夢見る人は、やはり知識を所有しているのである。例えば、友人の顔を識別できるとか、二人に一人加わり計三人になるといふ知識とかに裏付けされて、夢は夢なりの合理性を備えているのである。このような事態は、知識の所有という一点に関して、人がそれをい、わ、ゆ、る「目覚めている」時に所有すること、夢の中で所有することとの間には、いかなる相違も存在しないということを示している。現実知識を所有するということにとっては、「眠っている」時、夢の中、か、また「目覚めている」時、いわゆる現実、に、か、の区別は意味がないものであるように思える。

※

※

そもそも、夢と現実とを区別する指標は、通常考えられるほど明らかなものではない。私はその区別の指標が何であるか、はっきりとは語ることができない。なるほど、私も、日々の生活の実践の中では、かなり——絶对的にはないが——まちがいに夢と現実との間を区別している。恐らく、△正常な△人間なら誰でも、通常、夢と現実とを区別する指標を十分△心得た△上で生きている。ところが、その区別のための指標とは何かと問われ説明しようとするところ、あるいはその区別のための指標はどこにあるのだろうかと自問すると、私は、この問いに答えることの困難さを自覚することになる。殊に、夢という言葉がイデオロギー一般をもカバーする意味に解され、政治思想、法体系、倫理、宗教、常識、等のすべての形態を指示する語として用いられるなら、夢こそがまさしく現実なのだという考え方も生じてくる。すなわち、現実とは一つの時代一つの地域に認められる集団的な睡眠状態としてのイデオロギーに他ならないという考え方である。あるいはまた、話を一挙にそこまで広げるとはさし控えるにせよ、自分自身の個人的な夢の記憶をたどってみれば、私は、夢と現実の区別をあやしさを自覚できる。それは、現実と私が考えているもので、夢と私が考えているものの中に登場しないものはほとんど存在しないからである。それどころか私は、夢の中で、自分は現実とそのものを見ているつもりで、本当に美しい、まるで夢のように美しいといった類の感想を抱かせるような風景を見たこともあるし、また、劇中劇さながら、夢を見ていたのかと判断しながら目覚めるという経験を夢の中でもったこともある。更にまた、今自分は夢を見ているのだ、これは現実ではないぞと自分で自分に言いかけながら夢を見つづけるという経験をもった人もいるだろう。これらの例を挙げながら依然として私は夢と現実との区

別を立てているのであるが、それは、一つには、△存在感△の有無とでも名づけられるべきニュアンスの相違が否定しがたいものであるという事実にもとづいてのことである。昼間見る太陽と、夜に思う太陽との相違を「打ち勝ちがたく」意識させるあの△存在感△の有無である。しかし、その△存在感△なるものが一体何であるのか、やはり私にはよくは理解できない。△存在感△という、概念としてはあまりにも無規定的で、単なる言葉と言うにはあまりにも重い感情を意味するこの代物が何であるか、誰もよくは理解できないのだ。とはいえ、△存在感△の有無が、夢ないし単なる想念と現実とを区別すると考えられる以上は、その△存在感△なるものが、単なる想念がそれを超越した実在と触れ合うその接断面に由来するものと考えられているからであろう。しかし、実際には、夢の中でも△存在感△をとまなう経験をもちことがあるし、現実生活における経験が△存在感△を喪失することもあるのだ。それ故、結局、われわれは、夢と現実との区別は実際には名目上のものであって実質的には両者の間には何の相違も存在しないのだという見解に対して、その不当性を指摘するのは容易でないということに気付くことになる。夢と現実とを区別する指標についても、哲学で問題となる他の様々な基本的概念と同様、あのアウグスティヌスの有名な言葉が妥当するようには思える。すなわち、「だれも私にたずねないとき、私は知っています。たずねられて説明しようと思うと、知らないのです」という言葉である。これは、アウグスティヌスの著作である『告白』第十一卷第十四章から引用した——むしろ、この言葉をこの言葉の用いられているコンテキストから切り離して用いたのであるから借用したと言う方が適切であろうが——ものである。彼は『告白』第十一卷の時間論において、まず「それ（つまり、時間）」について話す

とき、たしかに私たちは理解しています。他人が「時間について」話すのを聞くと、たしかに私たちは理解しています」と述べた後で、「ではいったい時間とは何でしょうか」と自問し、その問いに答えるという形で先程私が借用した言葉を述べている。

ここで私は、夢と現実とをかなりまちがいに、区別しながら日常生活を営むわれわれも、その区別のための指標が何であるかを解明しようと試みると自らの無知を自覚することになるということに関連づけて、アウグスティヌスのあの有名な言葉を紹介したのであるが、実は、後に述べるように、アウグスティヌスのこの言葉およびそれとつながるその前後に展開されている、時間というものについての彼の思索は、知識についての反省を一つのアポリアに導いてゆくのである。

※ ※

私はすでに、知識が知識として成立する上で不可欠な条件としてその知識についての意識の存することを述べた。このような私の考察は、認識論に所属するものである。認識論とは、もっとも広い意味に解するなら、知識についての一切の反省を包括する。そして、そのような意味での認識論なら、何らかの知識が所有されたとされるその最初の時に、その開始の時をもっているということになる。というのは、知識を所有するということには、その知識を所有することの意識が常にともなうのである限り、知識についての反省は、その知識を所有するというその意識そのものの中ですでに芽生えていると言うことができるからである。プラトンやアリストテレスの著作はもとより、更にさかのぼってヘラクレイトスやパルメニデスの言葉の内にも、残された言葉が断片的なものであるにもかかわらず、洞察の深さという点で近代のロック、ヒューム、カントらの

知識についての反省におとらぬ洞察を獲得していたと推測させるようなものが存在しているのである。デカルトやロックやカントがはじめた認識論に着手し、これを展開し、これを完成させたというわけではない。いやそれどころか、認識論はまだ完成してはいない。認識論は、たしかに長い歴史をもっているが、その歴史は、大きなアポリアを背負いつづけてきた歴史である。エドムント・フッサールは、その著作『内的時間意識の現象学』の序論の冒頭の段落で、アウグスティヌスの時間論に言及しつつ次のように述べている。

「時間意識の分析は古来、記述的心理学と認識論の十字架である。ここに伏在する非常な難問題を深く感知し、それらの問題にほとんど絶望的なまでの辛苦を重ねた最初の人はアウグスティヌスであった。『告白』第十一巻の第十四―二十八章は今日もなお、徹底的に時間問題と取り組むすべての人びとによって研究されねばならない。なぜなら学識を誇る近代もこれらの事柄については、真剣に努力したこの大思想家を遙かに凌ぐほどの、たいした研究を成し遂げてはいないからである。今日もなおアウグスティヌスの言葉を借りて、もし誰も私に問わなければ、私は知っている。もし問う者に解き明かそうとすれば、私は知らないと言いうるであらう」。

フッサールは、ここで、認識論にとって「時間意識の分析」が不可避であるという点を踏まえた上で、その分析の困難さに言及しつつ、その作業に「絶望的なまでの辛苦」を重ねた人物としてアウグスティヌスを挙げている。しかし、彼のその「辛苦」にもかかわらず、「時間意識の分析」が「認識論の十字架」である、とフッサールは考えているのである。

後に述べるように、たしかに、知識についての反省が時間についての反省をまき込むに至ると、一つのアポリアが生じてくる。認識

論は時間論を欠くことができない。しかし、その時間論、すなわち「時間意識の分析」の△成果▽が、認識論の完成をさまたげるのだ。

※

※

さて、本論にもどうだろう。いかなる知識であれ、私が何らかの知識を所有する時には、私は必ず、同時に、その知識を所有することを意識しているということが、すでに確認されている。次に、私はその意識の性格について考えてみたい。

2+3+4+9という初歩的な足し算の知識とか、△人は、一括してバイブルと称される大小あわせて六十六冊の書物群全体を通して、己れの生活の意味を知ることができる▽という知識とかを所有するという事態はどのようにして成立するかを、ここであらためて考えてみよう。例に挙げたこれらの知識が知識として成立するためには、その知識の内容を構成する各々の要素および各々の要素の結びつき方がすべて一つの意識の△内▽に捉えられていなければならない。一つの意識ということが大切な点である。例に挙げた、△人は、一括してバイブルと称される……▽という知識が成立するためには、同一の意識に即して、少なくとも一度は、創世記第一章第一節からヨハネの黙示録の最後までに含まれるすべての書物、章、節、語句、語、を通読し、同時にそれら諸々の書物、章、節、語句、語、の表現する様々な意味をそれら相互の並列的、重層的、歴史的等、多種多様な関係において反省するという作業が遂行されなければならない。その際、例えば、創世記からマラキ書までを読む意識と、マタイ伝福音書からヨハネの黙示録までを読む意識とが同一の意識ではなく、互いに独立の二つの意識であるとするなら、これら二つの意識のいずれも、右の例のような、バイブルという書物群全体に関する知識を得ることはできない。すなわち、それ自身内的な

脈絡をもった一つの知識が可能となるためには、その知識を意識するその意識の同一性が保証されなければならない、ということなのである。意識の同一性は、何らかの知識が知識としての統一性、まとまりをもつためには不可欠の条件である、ということである。

とはいえ、そのような意識の同一性は可能であろうか？——私が現に何らかの知識を所有するというのであれば、そのような意識の同一性も現に存在していなければならないことになるのだが、同一の意識というものは果して可能であろうか？——可能であるとするなら、その同一の意識はどこに存在するのであるか？——実際、私は、知識と言われるものが成立する際の自分自身の内的意識の経験を反省する時、同一の意識なるものに関してこれらの問いを立てざるをえなくなるのである。私は今、知識と言われるものが成立する際の自分自身の内的意識の経験と述べたが、これは、或る一定の知識を時間の内ですべてに至るまでの、内的意識の成長の歴史と言い換えることも可能である。これらの言い回しで私の考えていることを明らかにするため、先に挙げた二つの例の内、単純な方の例、すなわち、2+3+4+9という初歩的な足し算の例を用いることにしよう。この知識が成立するためには、次のような内的意識の成長の歴史がたどられなくてはならない。すなわち、まず最初に2を意識する、次いでその2に加えるべきものとしての3を意識する、そして5の意識がそれにつづく。その後ここに意識された5に加えるべきものとしての4を意識する。そして最後に9という答の意識が生じてやっと2+3+4+9という知識が所有されるに至るのである。このような単純な知識でも、答の方に向かって成長してゆく意識の歴史的・時間的経験を介してようやく成立するものである。2も3も4もプラスという記号の意味も十分承知してい

る小さな子供がこの計算に失敗した場合、その失敗の理由として、その子供の意識が、右に述べたような時間の内でたどらなければならぬ諸々の段階から成る秩序を統一的に把握するための同一性をもたないということが考えられる。つまり、その子供に、最初の2の意識から最後に2+3+4+9という知識の所有に至るまでの、一定の幅をもつ時間において同一的なものとして持続する意識、その時間に耐える意識が、欠けているとすれば、その子供は計算に失敗するのである。通常、超時間的な永遠の真理と呼ばれる、論理や数理の上でのイデア的な知識ですら、それを知識として所有するためには、それを意識の歴史的・時間的経験を通して捉えてゆかざるをえない。そしてこのことは、一定の幅をもつ時間において同一のものとしてもちこたえることのできる意識、つまり同一性をもつ意識なしには不可能である。

しかし、一定の幅をもつ時間の中で同一性を保持する意識とは何か？——同一性を保持するとはいえ、その意識がまさしく一定の成長の歴史を遂げなければ、その意識に即して、何らかの知識が所有されるに至るということはありえない。そして、成長の歴史を遂げるとは、その意識が刻々変貌してゆくということを含意している。従って、例えば、2+3+4+9という知識が成立する際に不可欠な意識、すなわち一定の幅をもつ時間の中で同一性を保持する意識は、その一定の幅をもつ時間の中で刻々変貌してゆくものでなければならぬ。同一の意識がその同一性を保持しつつ、まず最初に2の意識として、次いでその2に加えるべきものとしての3の意識として、……等々と、次々に変貌してゆかなければ、2+3+4+9という知識は成立しない。しかし、それにしても、知識が成立するために不可欠な同一の意識が、その同一性を保持しつつ刻々変貌し

なければならぬ、というのは奇妙な表現である。同一性が認められるなら変化はない、変化が認められるならそこには同一性を保持するものはない、と考えるならば、同一性を保持するものが刻々変貌するという表現は奇妙に聞こえるはずである。つまり、その人は、同一性を保持するものは決して変化しない、と考えてしまうからである。そして、刻々変貌する同一の意識という表現に、白くて黒い（「白くない」）紙片とか、深くて浅薄な（「深くない」）思想とかの表現を耳にする時と同種の奇妙さを感じ取ってしまうのである。しかし、実際には、そのような人でも、日々の生活の中では、変化するのとは同一性を保持するものだけだ、と前提しているのである。例えば、誰それは十年前は小さな子供であったが今では立派な青年になった、などと言う時、同一の人間に即してその人間の子供状態から青年状態への変化を認めているのである。十年前に小さな子供を見たという経験と、今、目の前に立派な青年を見ているという経験が揃うだけでは、そこにはいかなる変化も認められない。ここに変化が認められないのは、右の二つの経験が揃うだけでは、十年前に見た子供と、今、目の前に見ている青年との両方をになう同一の人間を認めることにはならないからである。二つの経験が同一の人間に関するものとして結合される時はじめて、同一の人間の変化が認められるのである。この例から明らかのように、われわれは、実際には、素朴に、変化するのは同一性を保持するものだけだ、と前提しているのである。すなわち、われわれは、実際には、変化しないもの（実体）を根底に据えて、そのものの性質や状態の変化を考えているのである。従って、実際には、われわれが日々の生活の中でおこなう、変化に関する判断の前提となっている考え方と比較した場合、刻々変貌する同一の意識という思想に何か特別の難点が認め

られるわけではないと、ひとまずは語りたくなるのである。しかし、このような、常識の根底に存する考え方にこそ問題があるのだ。私は、刻々変貌する同一の意識という思想についての考察を更にすすめ、その思想にひそむ難点を指摘しようと思う。この指摘によって間接的に、常識の根底に存すると右に述べた考え方の問題もおのずと明らかになるう。

さて、知識が成立するためには不可欠な意識、つまり、一定の幅をもつ時間の中で同一性を保持しつつその時間の中で刻々変貌する意識と私が定式化した意識——このような意識は、果して可能であろうか？——そもそも一定の幅をもつ時間とは何だろうか？

私はここで、アウグスティヌスの言葉に耳を傾けることにしよう。『告白』第十一卷第十四章の、先に紹介した言葉の少し後の箇所、彼は次のように述べている。

「ではこの二つの時間、(つまり、過去、現在、未来という三つの時間の内)過去と未来とは、どのようにしてあるのでしょうか。過去とはもはやないものであり、未来とはまだないものであるのに」。

その後、現在という時間について、「現在が時であるのは過去に移りさってゆくからだ」と述べ、更に、次の言葉をもって第十四章を結んでいる。「私たちがほんとうの意味で時があるといえるのは、まさしくそれが、方向にむかっているからなのです」。

アウグスティヌスは、時間の諸部分なるものが非同時的なものであることをはっきりと捉えている。そして次の第十五章で、彼は、われわれが過去の時間や未来の時間について「長い時間」とか「短い時間」とか語るといふ事実に着して、もはやないあるいはまだないと言われる過去や未来の時間が、どうして長くあったり短くあ

ったりできるのだろうか、ないものは長くも短くもありえないのではないか、という趣旨の疑問を提出する。そして次の第十六章では、ないものは知覚されることも測られることもできない、と断定する。

たしかに私は、一定の幅をもつ時間、一時間とか二時間とかについて自ら語る時、また他人がそれらについて語るのを耳にする時、その意味を理解している。しかし、時間とは、時計の文字盤や天体の運行の場である宇宙空間とは異なり、いわばその諸部分は非同時的なものであるから、時間に関して実在すると言えるのは、誕生と同時に消滅しつつある、針の先ほどの幅もない現在の瞬間だけなのである。——しかし、それなら、実在する時間については一定の幅を語ることはできないのであろうか？——そもそも一定の幅をもつ時間とは何であらうか？——もしこれが実在しないとなれば、この中で同一性を保持しつつこの中で刻々変貌する意識とは不可能ではないだろうか？——そして、何らかの知識が成立するためには不可欠とされたこの意識が不可能であるとすれば、およそ知識なるものは存在しえないということにならないだろうか？——私が先に、知識についての反省が直面せざるをえないアポリアと語ったものの輪郭がようやく見えてきた。

しかし、ここであらためて、私の思索の脈絡を成す論理をたどりなおしてみると気付くことであるが、私は、時間についての一定の知識を前提した上で、知識一般の成立にとって不可欠な条件である意識を否定し、しかもこの否定によって知識一般の成立を否定しようとしているのではないだろうか？——すなわち、知識の成立ということを一般に否定するための論拠として、時間についての一定の知識を肯定しているのではないだろうか？——つまり、この私の思索の脈絡を成す論理そのものが一つのパラドックスを形成している

ように思えるのである。——しかし、たとえ、その通りであるとしても、たしかに、 $2+3+4+1+9$ という単純な知識を所有するに至るだけでも、一定の幅をもつ時間の中で同一性を保持しつつその時間の中で刻々変貌する意識が必要であるように思えるし、また、一定の幅をもつ時間なるものは実在しないという議論も正当性をもっているように思える。しかしまた同時に、アウグスティヌス自身も語るように、一定の幅をもつ時間（「長い時間」や「短い時間」）ほどわれわれに「親しみ深く熟知のもの」⁽²⁰⁾はないとも言えるのだ。この「熟知」されている一定の幅をもつ時間とはまったくの錯覚なのだろうか？——そして知識はすべて、この根源的な、また恐らくは人類に共通のこの錯覚にもとづく、それ自身もやはり錯覚として存在するだけののだろうか？——例えば、少なからぬ幅をもつ時間を介していずれ獲得されるであろう私のこの反省の（成果）も錯覚なのだろうか？

ここで私は、あらためて、アウグスティヌスの『告白』第十一巻の思索の歩みに目をとめてみることにしよう。

彼は、第十七章で、「未来を予言した人々」や「過去を物語る人々」に言及して、全くの無については何も語りえぬはずであるから未来とか過去とか言われるものは全くの無ではないのだろうと考えて、次のように述べている。「ですから未来も過去もやはりあるのです」⁽²¹⁾。まだない未来も、まだないものである以上は、やはりあるのであり、もはやない過去も、もはやないものである以上は、やはりあるのである。

そして第十八章で、彼は、「もしも未来と過去とがある、とするならば、私は知りたい。いったいどこにあるのかを」と語り、これに対応して、次のように述べている。

「どこにあるにせよ、およそあるものはすべて、ただ現在としてのみあるのです」⁽²²⁾と。

アウグスティヌスは、ここで、現在の瞬間だけが真の意味である、と言える時間なのだという考え方と、しかしそれでも未来や過去もあるのだという考え方を統一しようとしている。未来や過去が現在としてある、という自らの表現の意味を、彼は、一つの例に即して次のように解説している。

「たとえば私の少年時代は、もうないものであって、もうない過去の時のうちにありますが、しかも私はその心象を、その時代を想起し物語るときには、現在の時においてながめています。それは私の記憶のうちにまだあるからです」⁽²³⁾。この種の反省を介して、「いま私にとって明々白々となったこと」⁽²⁴⁾として、第二十章でアウグスティヌスは次のように述べている。

「未来もなく過去もない。厳密な意味では、過去、現在、未来という三つの時があるともいえない。おそらく、厳密にはこういうべきであろう。三つの時がある。過去についての現在、現在についての現在、未来についての現在。じっさい、この三つは何か魂のうちにあるものです。魂以外のどこにも見いだすことができません。過去についての現在とは記憶であり、現在についての現在とは直観であり、未来についての現在とは期待です」⁽²⁵⁾。

こうして、アウグスティヌスは、誕生と同時に消滅しつつある瞬間としての現在、実在する唯一の時であるとされたこの現在の中に、拡がり、を導入しようとするのである。すなわち、瞬間としての現在に根差す自己同一的な意識の働きを記憶、直観、期待の三つの局面に分割することによって、針の先ほどの幅もないこの現在の中に、拡がり、を導入しようとするのである。彼によれば、一定の幅をもつ時

間と言われるもののその幅とは、瞬間としての現在に実在する「精神そのものの延長」のことなのだ。それ故、第二十七章でアウグスティヌスは、自分自身の精神に呼びかけるのである……。『私の精神よ。私はおまえにおいて時間を測るのだ』と。

私は先に、何らかの知識が可能となるためには、一定の幅をもつ時間の中で同一性を保持しつつその時間の中で刻々変貌する意識が不可欠な条件であると述べた。しかし、過去はもはやないのであり、未来はまだないのであるから、例えば $2+3+4 \parallel 9$ という足し算をおこなう際の途上にある意識（例えば、5に加えるべきものとしての4の意識）にとって、計算の開始の時点での意識、すなわち2の意識はもはやないのであり、計算の完了した時点での意識はまだないのである。従って、これら三つの意識を比較してこれらが同一であるかどうかを決定することもできない。比較が可能なのは比較されるべき諸項が意識の \wedge 内 \vee に同時に存在していなければならぬからである。私は今、これら三つの意識と述べたが、実は、そのうちの二つは実在しているわけではない。正確に語るなら、三つの意識が現に意識しつつある意識として実在するのではない。常に、そのつどの現在に根差す唯一の意識のみ実在するのである。しかしそれにもかかわらず、過去や未来の意識が何らかの意味において存在するとすれば、それは、そのつどの現在に根差す唯一の意識が、一方では現在においてすでに終末に達しているもはやない過去の想起として働き、他方では現在から見てまだない未来への予期として働く限りにおいてである。とはいえ、例えば、 $2+3+4 \parallel 9$ という計算行為の終末に立って、たった今完結したばかりの計算行為の全体を想起作用に依拠しつつ眺める意識において、計算行為の過去に属する部分を遂行しつつあったその時々²⁸の諸々の意識がそっ

くりそのままの姿で再現されているという保証はどこにもない。すなわち、一定の幅をもつ時間の中で刻々変貌する意識、例えば $2+3+4 \parallel 9$ という足し算をおこなう際の、計算の開始の時点での意識、計算行為の途上の意識、計算行為が完了した際の意識が同一であるとは、誰一人として十分な根拠をもって語ることはできない。

たしかに、計算行為が完了した時点で根差す自己同一的な意識が、過去への一定のパスpekティブにおいて、一定の幅をもつ時間の中で同一性を保持しつつその時間の中で刻々変貌してきたものとして自己を了解することはある。だが、この自己了解において、今となつては過去に属するその時々²⁹に現に變貌しつつあった意識が完全に再現されているかどうか誰にもわからないのである。事情がこのようなものである限り、私は、私自身の自由にもとづいて、また私の責任において、 $2+3+4 \parallel 9$ という知識の絶対的確實性を主張することはできないのである。すなわち、一定の幅をもつ時間の中で同一性を保持しつつその時間の中で刻々變貌する意識というもの³⁰が、知識を所有するに至るために不可欠な条件であるとすれば、この条件の可能性を洞察できない私は、自らいくらかの知識を所有しているということを確実に知ることはできないのである。

$2+3+4 \parallel 9$ という単純な計算例の場合ですら、その計算行為の開始と完了が同時的である時、すなわち、この計算行為が一瞬の現在においてなされる時、その時においてのみ私は、計算する意識の自己同一性を保証しうるのである。従って、この一瞬の現在の内に $2+3+4 \parallel 9$ という知識を構成する各々すべての契機が包括されるという、その瞬間を措いて、私³¹がその知識の確實性を保証できる時はない。そして、その一瞬の現在に根差している自己同一的な意識がより多くの要素とより複雑なそれら要素間の結合を包括する

時、その意識はより高等な知識を所有しているのである。一定の知識を獲得するための活動の開始と完了が同時的であるなら、その瞬間に根差す意識は、過去への一定のペース・クティヴを援用することなしに、拡がりをもつことになる。この意識は、過去に属する一定のプロセスを介して成立した今ではなく、とどまる今に根差していることになる。しかし、このような今が存する時には、もはや、刻々変貌するという意識の性格は認められない。論理や数理の上での知識が永久不変に絶対確実であるとみなされることがあるが、それは、その知識が歴史性を欠如したとどまる今に位置すると捉えられているからである。しかし、このような捉え方には理由がない。とどまる今は、われわれの日々の経験の内に実現することはないからである。

※

※

しかしそれでも、われわれが歩むことのできる道として、とどまる今の理念を堅持して、拡がりをもつ精神の現前をめざし、自らの知性を訓練してゆく道が存するように思える。例に即して語るなら一冊の難解な書物でも、旺盛な探求意欲をともなう読解の反復を介して、次第に、その書物の思想全体を自分の意識の人内Vにあたかも一枚の絵画のように（すなわちその思想の諸部分全体とそれら諸部分の間の関係全体をすべて一挙に）眺めると思える現在の瞬間に接近することができであろう。⁽¹⁰⁾もちろん、その絵は、誰も見たことのない幻の絵画なのだが。しかし、少なくともここに述べた、研究意欲をともなう読解の反復とは、私の意識を拡がりをもつ精神へと無際限に接近させる一つの方法である。拡がりをもつ精神とは、誕生と同時に消滅しつつあるという時間の威力に打ち砕かれることのない意識の理念である。そこにおいてはじめて何らかの知識を所

有するということをその当人が絶対確実に知る理念的な境地である。しかしそのような境地の実現をめざす努力は無際限のものであり、しかもその努力は全面的に時間の中でおこなわれる他ない。すなわち、知識を絶対確実に所有すると考えることのできる境地へと踏み込もうとする私の営為が、まさしく知識の確実性をおびやかす時間の威力のもとにわが身をさらすことを強要するのである。これが、知識についての反省が時間についての反省をまき込むに至ると生じてくると、私が先に述べたアポリアである。そして、時間の威力にさらされつつその威力に打ち勝つ力を獲得しようとする行為、時間を支配しようとする行為が、つまり、私と時間との格闘が、他ならぬ私の文化的営為なのである。⁽¹¹⁾ 文化的営為には、常に、右のアポリアがつきまとう。このアポリアこそが、文化的営為の無際限性、永遠の未完結性ないし断片性を説明するものである。つまり、文化の歩みは原則的には終わりのないものであり、決して荒地地を耕しつくすことができない。

しかも、そのような文化的営為は時間のもとでなされるのである以上、その実現は、まだないと言われる未来の到来の前提の上に見込まれたものである。文化的営為とは人間に固有の活動であるが、その活動が実現してゆくのは、まだない未来が刻々現在化してゆくという条件の下においてである。そしてこの条件そのものは人間がつくり出すものではないのだ。

※

※

エドムント・フッサールは、半世紀以上も前に、「時間意識の分析は古来、記述的心理学と認識論の十字架である」と語っていた。⁽¹²⁾ 認識論は、今なおその十字架を背負いつづけているように思えるのである。つまり、依然としてわれわれにとって、知識の所有の確実

性の確信とは、実現を望まれる祈願の対象でしかないのである。

注

(1) 知識の無意識的な所有なるものについての私見を、ここで述べておきたい。

本稿本文の主張に同意しない人は多い。つまり、知識を所有しながら、その知識に無自覚である場合があるのではない。無意識の領域にも知識が存在するのではない。言い換えれば、意識の〈外〉と呼ばれるどこかにも知識は存在するのではない。従って、知識を所有するということが成立するために、その知識の所有を意識することは不可欠な条件というわけではないのではない。例えば、或る弁護士について、彼には法律の知識があると語る時、たしかにわれわれは、彼がその時、六法全書に記載された全法律を限なく明晰に心中に捉えているということを確信して語っているわけではない。法律の知識があるとは、必要に応じて役立つ法律を探しあてたりするのに他の人より巧みであるといった程度の意味なのである。このような場合でも法律の知識があると言えるなら、その知識は心の無意識の領域にあるということであろう。その知識は、それ故、今は、当人から見ても、どこにも存在していない。それ故、その人は知識を所有していない、と私は語るのである。ここで問題となっている事態を、彼は無意識的に知識を所有すると表現しようが、彼は知識を所有していないと表現しようが、その差は重要なことではない。重要なのは、本稿本文に述べた思想、つまり知識の所有にはその知識の所有の意識が必ずともなうという思想に対する決定的な反論は、何もないということである。

古来、心の無意識な領域に知識の存することを主張すると解釈でき、認識論としてプラトンの想起説が有名である。対話篇『メノン』の記述によれば、登場人物のソクラテスは、探求という出来事の不合理的

を指摘して次のように語っている。「人間は、自分が知っているものも知らないものも、これを探求することはできない。というのは、まず、知っているものを探求することはありえないだろう。なぜなら、知っている以上、その人には探求の必要はないわけだから。また、知らないものを探求するということもありえないだろう。なぜならその場合は、何を探求すべきかということも知らないはずだから」(藤沢令夫訳『メノン』、プラトン全集9、一九七四年、岩波書店、二七六頁、と。しかし、ソクラテスは、この議論を「論争家ごみの議論」(前掲書、二七六頁、二七八頁)、「情弱な人間の耳にこそ快くひびく」(前掲書、二七八頁)議論と称している。そして、この議論に対して、「仕事と探求への意欲を鼓舞する」(前掲書、二七八頁)説として想起説を語り出す。すなわち、人間の魂は不死なるものであるが、それらの多くを今は忘れ去っている。探求とか学ぶとかは、忘れていた知識を、すなわち魂の無意識の領域にたくわえられている知識を、意識化することなのだ。つまり、探求とか学ぶとかは、想起することになるのだ、と語る。知識の無意識的な所有を語ることになるこの説は、何らかの事柄についてそれを知らないが知っていると言っていることになる。たしかに、或る事柄はこれを知っているか知らないかのいずれかであるとする二者択一の論理によれば、探求という出来事の不合理性を示す先の議論からのがれる道はない。つまり、探求という出来事に何らかの本性というものがあるとすれば、それを、不合理性の指摘によって矛盾そのものとして提示する先の議論からのがれる道はない。想起説は、この議論と対決し、探求という出来事の可能性を基礎づけ、人間の探求意欲を「勇気づけ」(前掲書、二九四頁)るため、知らないが知っていると言えよう矛盾の事態を想定するのである。しかしこれは、探求という出来事の本性を矛盾そのものと解釈させる先の議論を排し、別の矛盾を引き入れるもので

ある。恐らくプラトンは、この事情を十分自覚した上で、登場人物ソクラテスに、「ほくは、ほかのいろいろの点については、この説のためにそれほど確信をもって断言しようとは思わない」(前掲書、二九四頁)と語らせているのである。

- (2) 長坂公一訳『書簡集(第七書簡)』、プラトン全集14、一九七五年、岩波書店、一四六～一四八頁、を参照せよ。「突如として、いわば飛び火によって点ぜられた燈火」についての記述が見られる。

- (3) John Locke, An Essay concerning Human Understanding, the Fifth Edition 1706, Book II, Chapter I, § 1.

- (4) John Locke, *ibid.*, Book II, Chapter I, § 19.

- (5) John Locke, *ibid.*, Book II, Chapter I, § 10.

- (6) John Locke, *ibid.*, Book IV, Chapter II, § 14.

- (7) 山田晶訳『告白』、世界の名著14 (アウグスティヌス)、一九六八年、中央公論社、四一四頁。

- (8) 前掲書、同頁。尚、引用箇所中の「」内は筆者による補足である。以下も同様。

- (9) 前掲書、同頁。

- (10) 立松弘孝訳『内的時間意識の現象学』、一九六七年、みすず書房、九頁 (Edmund Husserl, Vorlesungen zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins, hrsg. von Martin Heidegger, Sonderdruck aus: Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung, Bd. IX, 1928, S. 2.)。

- (11) vgl. Immanuel Kant, Kritik der reinen Vernunft, A187-188, B230-231. ここにカントは、次のように述べている。「われわれは、いささか逆説的とも思われる言い方をすれば、持続的なもの(実体)だけが変化させられ、変易しうるものはいかなる変化をもこゝろみならず、転変をこうむる……とすることができ。それ故、変化は、実体に即してのみ知覚されうるものであり、発生しないし消失は、端的に、

それが持続的なものの規定にのみ関わるということではなければ、いかなる可能的知覚とも全然なりえない」。

- (12) 山田晶訳『告白』、世界の名著14 (アウグスティヌス)、一九六八年、中央公論社、四一四頁。

- (13) 前掲書、四一五頁。

- (14) 前掲書、同頁。

- (15) 前掲書、同頁。

- (16) 前掲書、四一八頁。

- (17) 前掲書、四二四～四二六頁、に、「天体の運行」と「時間」との関係についての考察が見られる。

- (18) 「様々な諸時間は同時にではなく、継起的に存在する(様々な諸空間が継起的ではなく、同時に存在するのと同様である)」

- (Immanuel Kant, Kritik der reinen Vernunft, A31, B47.)。

- (19) 山田晶訳『告白』、世界の名著14 (アウグスティヌス)、一九六八年、中央公論社、四一四頁。

- (20) 前掲書、四一八頁。

- (21) 前掲書、四一九頁。

- (22) 前掲書、同頁。

- (23) 前掲書、同頁。

- (24) 前掲書、同頁。

- (25) 前掲書、四二二頁。

- (26) 前掲書、同頁。

- (27) 前掲書、四二九頁。

- (28) 前掲書、四三一頁。

- (29) 記憶違いの可能性を完全にまぬがれている人は一人もいないからである。

- (30) 感覚のようにすばやく働く知性、俊敏な知性、の実現をめざすこの人々を、われわれは、「愛知者」と呼ぶことができよう。プラトンの対

話篇『バイドロス』の中の次の箇所を参照せよ。「これを知者、と呼ぶのは、バイドロス、どうもぼくには、大それたことのように思われるし、それにこの呼び名は、ただ神のみにふさわしいものであるように思える。むしろ、愛知者（philosophos、哲学者）とか、あるいは何かこれに類した名で呼ぶほうが、そういう人にはもっとふさわしく、びったりするし適切な調子を伝えるだろう」（藤沢令夫訳『バイドロス』、プラトン全集5、一九七四年、岩波書店、二六五頁）。

(31) 文化人とは第一義的には時間との格闘士であり、また荒れ地を耕す者である。耕地の産物を享受するだけの者は第二義的にのみ文化人である。

(32) 先の引用箇所——注(10)——を参照せよ。

(33) バイプルの次の言葉を参照せよ。「汝らのうちもし知恵の欠くる者あらば、咎むることなく、また惜むことなく、凡ての人にあたふる神に求むべし、然らばあたへられん。但し疑ふことなく、信仰をもて求むべし。疑ふ者は、風に動かされてひるがへる海の波のごときなり。かかる人は、主より何物をも受くと思ふな。かかる人は二心^{ふたこころ}にして、凡てその歩むところの途さだまりなし」（ヤコブの書、第一章第五、八節）。